

人間活動と気候変動を含むさまざまな原因によって生じる「土地荒廃」であると定義されている。「土地荒廃」は、植生の破壊、土壌の侵食や塩性化、固結化などのプロセスにより生物生産性が劣化して人間の生命維持システムを脅かす現象を言う。

こうした「砂漠化」現象、特にサハラ南緑アフリカにおけるそれについては、1977年の国連砂漠化会議（UNCOD）以来、多額の資金を投じて多様な対策がなされてきた。しかし、防止対策の成功例は少ない。特に、住民の姿の見えない技術偏重のトップダウン方式の大規模プロジェクトは、ほとんど失敗に終わっている。こうした過去の失敗の反省のうえに立って、『条約』では住民参加とNGOの役割を重視するコミュニティ・レベルのボトムアップ・アプローチを基本戦略としている。それは、村落レベルにおける土地生産性の修復と向上、土地・水資源の適正管理を中心に据えた「砂漠化」被災地域の持続的発展を目標とする総合戦略にほかならない。この戦略を実効あるものにするためには、被災地域における貧困の撲滅や土地制度の改革、地方分権の推進、市場アクセスへの不利な条件の排除、食糧安全保障体制の整備、さらには国際市場・貿易における不利な条件の排除など、「砂漠化」問題の根源に関わる社会経済的側面に対する積極的な対応が不可欠である。

科学技術的対応では、土地と水の利用に関する伝統的な技術とノウハウの役割が重視される一方で、代替エネルギーの模索、「砂漠化」の状況と対策実施効果のモニタリング、干ばつ早期警報システムなど、革新的な対応策の進展が期待されている。また、現場のコミュニティから地球規模に至る各レベルの地域組織間の有機的な連携による行動計画の推進が期待されている。

以上のようなマルチセクトラルなアプローチと、さまざまな地域レベルでの取り組みとを統合した

学際的・総合的アプローチを必要とする『条約』の実質的な実施に対して、環境科学を標榜する地理学からの積極的な貢献が期待されるところは少なくない。「砂漠化」の実態と対策効果のモニタリングとアセスメントの手法の確立や、そのための基礎をなす各種インディケーターの開発などが、当面の重要な検討課題である。過去二〇数年間のアフリカ調査研究と砂漠化に関する国際専門家パネルの一員として『条約』制定にかかわってきた経験を背景に、こうした課題を中心に学術研究の成果をアフリカの現場に還元することを通して、「砂漠化」問題の解決にいくばくかの貢献ができればと考えている。

平成8年

◎11月27日

共同研究（B）中間報告

デカルト「観念論」の論駁

——デカルト哲学へのカントの対応の一面——

湯 浅 正 彦

わたしはすでに久しく、カントのテキストを手掛かりにして現代において哲学する途を探ってきた者である。カントのテキストが蔵している理論的な潜在力を適切な表現へともたらすことによって、現代哲学の諸動向に優るとも劣らない哲学的な見解を構築しうることを確認している。その際決定的に重要なのは、適切な表現を入手するための工夫である。カント自身言うように、「著者が自己の概念を十分に規定しないと、それによって時折自己自身の意図に反して語ったり、思考したりさえもすることになる」のであり、しかも探究の途上では概念の十分な規定は通常手に入らないのであってみれば、カント自身のテキストは、彼が狙っていた問題事象を思考し語るための試行錯誤のドキュメントという性格を常に多少とももつ

のである。そうしたテキストを手掛かりとしつつ、事象に適合した表現を創り出す作業がいかに困難なものであるかは、瞭然であろう。とりわけ、カントが相手取っていた事象は、彼の力量をもってしても、十分に制御された論述の展開を許さなかったものであってみれば。

ともあれ、以上のような背景のもとにわたしは、当面の共同研究において、デカルト哲学へのカントの対応の一面を取り上げ、そこにカントの哲学的思考のリアリティの一端を見届けることを試みた。言うまでもなくデカルトは、近世哲学の開祖と称えられる、端倪すべからざる知的巨人であり、カントがいかなる仕方でデカルト哲学に対応したかは、カントの哲学的思考の一つの試金石であった。カントの対応は多面にわたり、とりわけ自我論の一つの焦点があったと推察されるのだが、這般の事情からそれを取り上げることは避け、デカルトの「観念論」と呼ばれるものをカントが論駁する試みを考察の主題とすることにした。それは、いわゆる外的な諸物、ないしはそうした物の形成する外的世界の存在を疑う見解であって、デカルトが切り開いた哲学的思考の路線に宿痾のように纏い付く難題である。カントは『純粹理性批判』や『プロレゴメナ』の幾つかの箇所ですそれを論駁することに従事したが、『批判』の第二版に新

しく付け加えた「観念論論駁」と題した論述が決定版であると推察される。わたしは、そのテキストの徹底的な解釈をつうじて、デカルトの「観念論」を論駁する際のカントの切札が、「超越論的観念論」という彼自身の哲学的見解であることを明らかにした。

「わたし達に可能な経験の対象のすべては……たんなる表象以外のものではない」と定式化される「超越論的観念論」は、『批判』第一版でのデカルト「観念論」の論駁の議論では大々的に使用されていたのに、「観念論論駁」においてはまったく言及されなくなり、それどころか「わたしの表象のすべてから区別された外的な物」の存在を証明することが目論まれているのであるから、粗忽な論者はここにカントの変説を藪睨みすることにもなる。しかしわたしは、徹底的な解釈によって、この二つの文脈は個別であり、それぞれで語られる「表象」は意味内実を異にすることを明らかにし、かつ双方が整合的に結合されうような一つの構図を描くことにほぼ成功したと考えている。まことに、カントが事象を明らかにするために使用した術語の意味内実を確定することと、その術語によって当の事象そのものを解明することとを、一挙に遂行するような解釈こそが、いかに困難であれ、追求されねばならないのである。